# 研究テーマ：読む力を伸ばすための指導の工夫

所属　高知県立安芸中学校
氏名　亀川　みかよ
RG　　SH３

## １　研究の背景

県立安芸中学校 2 年生を研究対象とした。この学年は、入学希望者が全員入学している。アルファベットの習得に苦労する生徒がいる一方、英語検定 5 級（H16 年 1 月実施）で満点を取る生徒もいて学力差が大きい。CRT の全国比は全ての項目で 100 以上である。領域別では、「聞くこと」「読むこと」は、「話すこと」「書くこと」に比べて 10 ポイント以上低い。特に得点率で見ると、「読むこと」は、「聞くこと」よりも 12.1 ポイント低い結果となっている（第１表参照）。

## ２　リサーチ・クエスチョン

読む力を伸ばすための指導は、どのようにすればよいか。

## ３　予備調査

（１）　授業観察の結果

音読の声が小さくなってきている。家庭学習の個人差が大きい。

（２）　生徒の英語学習意識

昨年入学時から 1 学年終了時までの意識調査により、英語を学ぶことに興味があると答えた生徒は、88.8％から 66.7％になった。アンケート調査の結果、文のルール 35.4%、英文を書くこと 16.7%、発音 14.6%、つづりを覚えること 14.6%、書かれている文の内容が理解できない 10.4%等が、英語学習の障害になっていることがわかった。

（３）　英語力を示すデータ

CRT を小領域別で見ると「英文の内容を正しく理解すること」の項目が最も定着率が低い。英語検定 5 級分野別得点率で見ると、リスニング会話文 72.6％、語彙・熟語・文法 74.4%の順で低くなっている。NRT を領域別で見ると「読むこと」の項目が全国比 103%と最も低くなっている。読む領域の中でも特に「手紙の内容を理解し応じること」の項目の定着率が低い。

第１表　CRT 全国比及び得点率，NRT 全国比

| 領域別 | CRT 全国比（全国＝100） | CRT 得点率 | NRT 全国比（全国＝100） |
|---|---|---|---|
| Ⅰ　聞くこと | 108 | 84.4 | 104 |
| Ⅱ　話すこと | 121 | 80.5 | 112 |
| Ⅲ　読むこと | 109 | 72.3 | 103 |
| Ⅳ　書くこと | 120 | 72.3 | 109 |

CRT：H16 年 3 月実施，NRT：H16 年 6 月実施

## ４　仮説

（１）語彙の定着を図るよう取り組めば、読む力が伸びるであろう。
（２）音読を積み重ねることで、英文への抵抗感が減り、文章理解が促進されるであろう。
（３）文章のフレーズごとのまとまりを、意識して読むよう取り組めば、読む力が伸びるであろう。

## ５　計画の実践

（１）　語彙の定着を図る取組

・中学 1 年次に習った語彙を 241 組にまとめ、英語から日本語へ(No.1～No.３)合計３回、その逆の日本語から英語へ３回、合計 6 回テストを実施した。
・家庭学習の課題として、2 年次で習う新出語彙の中に、1 年次の定着率が悪い語彙を混ぜたプリントを復習させた。課題を提出する曜日とテストを実施する曜日を決めて習慣化した。
・2 年次の新出語彙は、単元の区切りを超えてプリントにし、本文を学習するときには何度か復習されている状態にした。

（２）　音読の取組

習ったページを授業開始時に一斉に読む練習をさせた。教師が意味のまとまりを意識させるようリードして読んだ。

（３） フレーズ読みの取組

フレーズのまとまりのルールを文法事項に合わせて指導した。フレーズの切れ目にスラッシュを入れさせ、区切りを意識して読ませた。

（４） 長文を読む取組

教科書の数ページにわたる読み物教材を、1 枚のプリントに作り直し、長文を読みやすくすると同時に、量に慣れさせるようにした。

（５） コミュニケーション活動の取組

教科書の本文の内容が理解できたかどうか確認するときには、Q-A や T-F などを取り入れた。

６　結果の検証

（１） 語彙の定着を図る取組については、1 年次の語彙の定着率が 64.9%であった。特に定着率の悪かった 5 回目のテストは、再度取組を行った結果 55.6%から 79.6%になった。

（２） 音読の取組については、声が以前より出るようになった。

（３） フレーズ読みの取組については、Reading 教材を学習する際に集中的に行った。フレーズの切れ目を答えさせるテストを、9 月と 12 月に実施して比較した結果、正答率は 77.2%から 100%になった。

（４）読解力を測るテストの作成に時間を費やし、基礎データの作成が 9 月になった。最終的には、英検 4 級の問題を参考にし、6 問（319 語、572 語、669 語、353 語、628 語、675 語）作成した。試験時間は 30 分間で、正答率と処理速度を測ることとした。12 月に 9 月と同じ条件で実施し、比較した。その結果、正答率は 44.5%から 62.5%となり、処理した問題数は 83.0%から 97.5%になった。

７　成果と課題

語彙定着の取組については、取組時は正答率 99%であった生徒が、数ヶ月後にチェックすると 54%になった。そのことから継続的な語彙指導が課題となった。そこで課題提出と確認テストの曜日を決めて習慣化することにした。その結果、勉強をせずにテストを受ける生徒がいなくなった。また、課題の提出率も上がった。

音読の取組については、当初は生徒の声が小さい状態であったが、次第に声が出るようになり、意欲的に取り組めるようになった。

フレーズのまとまりの指導では、不定詞や前置詞の区切りの位置はまだ十分定着できていない。接続詞の位置は一定意識できてきた。それに伴い、長い文章に対する心理的負担感が減少してきた。実際、9 月当初に読解力を測るテストを実施した時は、生徒の中に重苦しい雰囲気が流れた。12 月に同様のテストを行ったときには、9 月のような重苦しさは全くなく、正答率が 18%上がった。9 月には 46%の生徒が、最後の問題まで行き着かなかったが、12 月には、92%の生徒が最後の問題まで行き着いた。処理した問題数が 14.5%増えたことが、読む速度が速くなったことを示している。

処理した問題数を 75%から 100%に伸ばした生徒は、「全部読めなくても問題に答えられる。」と感想を述べている。そのことから語数の多さに対する抵抗感が減ったことがうかがえる。その生徒の正答率は、25%から 50%に伸びた。

読む力を伸ばすという研究課題は、多くの要素が複合しているため、検証方法に課題があった。今の段階では、それぞれの仮説の有効性を十分検証できたとはいえない。最終的には、学年末の CRT テストの結果を見て結論を出したい。

取り組む中で、今まで読解力を測る視点に一貫性がなかったことに気づいた。今後は読解力を測る際には、視点を絞り、その変化を継続的にチェックする。また、書かれてあるものをもとに、コミュニケーション活動へどうつなげていくかも考えたい。